



## 保護者との関わりをとおして

### 反省する保護者

私は保護者と面談をすることがあります。多くの場合、子どもに何か問題があったときです。ほとんどの親は自分の子どもとの関わり、育て方に何か問題があったのではないかと「反省」をしています。そして仕事を休んでまで学校に足を運んで、見ず知らずの私と話してみようと考えてくださいます。相当困っています。そんな保護者は皆、真正面から問題に取り組もうとしている真面目な保護者です。私自身も子育てを経験しているので、そういう「子どものつまづき」が見られたときにやっぱり自分の子どもとの関わりについて「反省」していました。そして、「どうしてうちの子は他の子と同じことができないのだろう。」と悩みました。「なんで、こういう子になっちゃったんだろう。」と。発達障害を持っていればなおさらです。

### 子どもは親の思うようには育たない

考えてみてください。子どもの行動は親に反省をさせれば変わるのかということ。子どもは親ばかりではなく、学校の先生や友達、授業で聞いた話、読んだ本、聞いている歌の歌詞など様々なことから影響を受けて考えて判断して、行動しているはず。それでも、影響を受ける環境をうまく用意できなかった親の努力がやっぱり足りなかったのかもしれないと親は反省します。たとえ、親の思う「いい環境」を用意しても、それをどう受け取るかはやはり子ども自身の受け取り方でしかないので。親が思うように子どもが受け取らないことについて、それを親がコントロールすることはできないのです。子どもは親の「作品」ではないのです。親の努力が及ばないことなどあって当然なのです。努力が成果につながるとは限らないのが子育てのおもしろいところなのです。

### 親の知らない人間関係の中で子どもは生きる

子どもは母の胎内にいたときは母の体の一部だったかもしれないのですが、生まれ出ると一人の人として名前が与えられて生きて行きます。授乳の期間が終われば、親の体とは関係のない食べ物で体を成長させ、自分の好きな食べ物を選んで食べるようになります。保育園に入れば、親の知らない友達の名前を口に、親の知らない「仲間」と一日のほとんどを過ごします。いつの間にか、親とは全く別の人間関係の中で生活するようになるのです。思春期ともなると、親に言わないことも増えます。おしゃべりな子どもも、親に言っていいこととそうでないことをちゃんと区別しています。そうやって、どんどん親の知らない世界を増やしていくのです。でも、家ではそれほど変わらず、今まで通り、手伝いどころか、自分の身の回りのこともたいしてできていない。親としては「まだまだ子ども」と思うから、手を出し、口を出し、子どもに対する考えや態度は変わりません。親にとって自分の子どもは子どもなので、意識をしないとなかなか変われないものなのです。いわゆる、「親離れ」を子どもはしているのに、親は気付かず「子離れ」しそびれてしまっていることがあるのです。



止まっているように見えても  
気持ちは変化している

ましてや、目の前に口をきかなかったり泣いていたりするわが子がいれば、子どもの苦悩を我が事のように感じ、動揺します。それは親として当たり前な感情です。それでも、子どもは成長するのです。親の知らない人や情報と関わりながら成長していくのです。中学生から高校生は思春期まっただ中。大人になっている部分とまだまだ子どもの部分とを持っています。大人になったり、子どもになったり、行ったり来たりしながら、失敗しながら、失敗から学びながら成長していくのが思春期なのではないでしょうか。止まっているように見えても、ちゃんと心の中で何か動いています。「何とかしなくちゃ」と焦る気持ちもありますが、子どもは親以上に「どうにかしたい」と思っています。子どもの心の動きをしっかり見守り、心の中で「がんばれ」とエールを送りつつ、待つことも必要かと思います。

いろいろあって、それが人生

先日テレビで水泳の池江璃花子さんのことを取り上げている番組を見ました。彼女は現在20才。白血病に冒されながらも闘病生活を経て水泳選手として復活しました。彼女は病気によって筋力も落ち、記録もかつての記録が出せなくなってしまっている中で「病気もあって、うまく行かないことがあっても、それも含めて私の人生である。」というような発言を番組の中でしていました。そうなのです。人生順調でなくて当たり前なのです。病気もあれば心が深く傷つくようなこともある。今のようなコロナ禍で社会全体が困ったことになることもある。そういうことも含めて人生だということなのです。思春期の心が柔軟なうちに立ち止まって考える時間を持たせて子どもこそ、強くしなやかに生きて行く力を蓄えることができるのではないのでしょうか。人生には学びこそあれ、全く無駄な失敗はないのではないのでしょうか。つまり、思春期の頃はいろいろあって当然です。むしろ何も無い方が心配です。小さな失敗を乗り越えて「これくらいのことは自分で乗り越えられる。」というスキルと自信を積み重ねて行くことが力になります。大人になればなるほど、職場や家族など抱える問題も増え、大きなものになっていきます。大人になっても困難はあって当然で、何事もない人生はあり得ません。その時に冷静に判断し、決断できる力、がそれまでに蓄えられているかの方が大切です。

保護者に寄り添う

不登校や登校渋り、友達関係のトラブル、受験の失敗等子どもにとってのつまづきはどんな子どもにもあって当たり前です。時間が経てば、人生をより深く、その人らしいものにする、むしろ大切なエピソードとなるものです。子どものトラブルに不安になり、傷ついている保護者には「子育てに失敗はありません」と私は伝えるようにしています。「子育てに失敗したくない」「自分ががんばらなくては」と子育てや子どもの成長を楽しめない保護者を時々見かけます。私自身の子育てを振り返れば、私も余裕がなかったように思います。他人のミスを許さない、厳しい世の中の雰囲気があり、「子育ては親の責任」となりがちで、子育てしづらい時代です。せめて、教師である、私たちが保護者に寄り添い「大丈夫」と言葉をかけられるといいなと思います。



コロナウィルスの流行第3波がピークの頃に書きました。  
生命の危険が日常の中、ギスギスしがちな空気がありました。

